

自由律俳句と 詩人の俳句



樽見博
Tsurumi Hiroshi

目次

序にかえて 時代の生む魅力——中塚一碧樓の自由律句…… 9

俳句史における自由律／「俳句とは何か」と問い続ける

第一章 自由律俳句について

1 総合誌『俳句人』と敗戦に直面した自由律俳人たち…… 17

俳句全集から除外された自由律俳句／『俳句人』のなかの自由律俳句

『俳句人』第一巻より／松尾敦之「原子ばくだんの跡」

2 松尾敦之『原爆句抄』など…… 29

「とんぼう、子を焼く木をひろうてくる」／戦時中の松尾の句／松尾の戦後／『俳句人』第二巻より

3 『自由律』の創刊と生活の自然詩…… 41

	俳句雑誌の統合と分裂／『自由律』創刊号「第一輯」から／戦時から日常へ
4	荻原井泉水の戦後の出発（上）……………53 勝算の無いことは解りきつてみた／レジスタンスの精神／『千里行』と『一不二』より
5	荻原井泉水の戦後の出発（下）……………65 激動の時代でもゆるぎなく／時代への柔軟性／『層雲』復刊号より／『層雲』復刊後の内紛
6	合同戦争俳句集『みいくさ集』が描いた銃後……………77 自由律戦争俳句集／『みいくさ集』の銃後俳句
7	改造社『俳句研究』における自由律俳句……………87 俳句総合誌『俳句研究』と俳壇ジャーナリズムの誕生／秋桜子による自由律批判 『俳句研究』第一巻より
8	昭和13年の『改造』『俳句研究』『俳句欄』……………99 俳句欄常設という画期／『俳句研究』昭和13年の自由律作品

9	終戦直後の「暖流」と自由律俳句の理念……………	109
	『暖流』の復刊／論客が集う雑誌	

10	荻原井泉水が継承した芭蕉の精神（上）……………	117
----	-------------------------	-----

正統性の根拠としての芭蕉俳諧／井泉水と楸邨の芭蕉俳句評釈

11	荻原井泉水が継承した芭蕉の精神（下）……………	125
----	-------------------------	-----

それぞれの芭蕉観／「俳句の本質は自由律」

12	萩原蘿月と内田南艸、まつもと・かずや……………	133
----	-------------------------	-----

感動律と口語俳句／蘿月の個性／南艸『光と影』より／まつもと・かずやの口語俳句

第二章 自由律俳句の諸相

1	中塚一碧楼の句評と俳句……………	147
---	------------------	-----

句評から俳句観を追う／季節感横溢の俳風

2	荻原井泉水の句評——草田男・虚子との違い……………167 井泉水の句評／草田男と虚子の句評
3	尾崎放哉と種田山頭火の短律句……………177 『大空』と『草木塔』より／比較すると見えてくる両者の本質／井泉水の放哉への強い思い
4	橋本夢道の長律句……………193 二十～三十代の句／自由律からプロレタリア俳句へ／『俳句生活』の創刊
5	改造社『俳句三代集』別巻「自由律俳句集」……………207 別巻扱いされた自由律／参加を辞退した俳人たち
6	『層雲』が生んだ早逝の俳人・大橋裸木について……………215 「骨を削り肌に刺す」制作ぶり／短律時代／荻原井泉水の二行句
7	三重県で生まれた自由律俳句誌『碧雲』……………229 ルビ付き俳句を批判／田園のモダニズム

第三章 詩人の俳句

1 英文学者詩人・佐藤清の俳句……241

「詩は言葉の音楽的表現である」／佐藤清の俳句

2 国民詩人・北原白秋と自由律俳句……249

白秋の俳句／前田夕暮『白秋追想』／前田夕暮の俳句

3 鷺巣繁男——流謫の詩……257

通信兵から開拓農民へ／「内部震撼なくして真の韻律は生じない」

4 木下夕爾——孤独に堪える……271

孤独に堪え抜いた詩人／閉ざされた夢／友人・村上菊一郎の俳句

5 千家元麿の一行詩と俳句……285

徹底して平明で純な詩／「寂」感充溢の世界

6 北園克衛——モダニズム詩人たちの俳句……299

北園克衛と『鹿火屋』／『風流陣』の俳句

7 日夏歌之介——社交の俳句……313

濃厚な詩語／日夏歌之介の俳句

8 ゆりはじめ——横浜大空襲を問い続ける疎開派……323

疎開と空襲／『キヤッツアイ』と成田猫眼

付録・荻原井泉水著書目録抄……333

句集／井泉水句集年刊パンフレット／合同句集／全集／俳論・俳句入門書

芭蕉・一茶・子規関係／尾崎放哉・種田山頭火関係／随筆集その他

あとがき……348

序にかえて 時代の生む魅力——中塚一碧楼の自由律句

俳句史における自由律

二〇一四年二月に『戦争俳句と俳人たち』（トランスビュー）を刊行したが、自由律の俳人については、ごく一部を除いて詳しく触れることができなかったなという思いが残った。革新を本分とする自由律俳句にとって、昭和維新とか大東亜共栄圏構想など、ある意味での「革新」がどのように作用したか興味のあるところであった。

自由律俳句といっても多くの人々はピンと来ないか、尾崎放哉おざきほうさいや種田山頭火たねださんづかの非常に短い俳句のことですね、といった程度の認識だろう。現在俳句そのものは、TBSの人気番組「プレバト」などで、その面白さや難しさが広く知られるようになったが、それは五七五の定型、季語と切れ字の効用、取り合わせの妙を原則とする伝統的俳句である。もちろん破調の魅力も語られることもあるが、まず自由律俳句が問題になることはない。そこで「咳をしてもひとり」（放哉）とか「鉄鉢のなかにも霞」（山頭火）といったような句を提出しても評価されないだろう。

専門的な俳句史でも、自由律俳句は除外されるか別扱いされるのが普通である。現在も、自由律俳句結社「青穂せいほ」主催の尾崎放哉賞（一般と高校生を対象）が設けられ、普及活動をしているが、実際に

自由律俳句を作る俳人は俳句人口に比して少なく、まして、その将来性、文学としての可能性が論じられることは殆どない。

前記拙著を執筆していた折に読んだ、太平洋戦争勃発に際しての飯田蛇笏いいただだごうの評論の中で、中塚一碧なかつかいっぺきの作品がとり上げられていた。

とつとう鳥とつとうなく青くて低い山青くて高い山

伝統俳句の側から否定的に捉えられた作品なのだが、私自身はすごく惹かれるものを感じた。何の鳥か、「凸騰（とつとう）」ならば、雲雀ひばりでもあろうか、高い鳴き声で高く舞い上がりながら鳴いている。言葉の反復は鳴き声の繰り返しを反映し、さらに「青くて低い山青くて高い山」とこれも反復表現すると同時に、目の前に広がる夏の山々を描いている。「とつとう」を「訥々」と取るなら、山鳩のあの独特の繰り返される低い鳴き声かもしれない。リズムが心地よい。ところが、この句は昭和5年、秋田の檜木内ひのきないでの句会の折、「とつとうとつとう」という鳥の鳴声を聞いて地元の人に聞くと「とつとう鳥」と教えられたが、筒鳥を詠って発音したものらしい。偶然が幸いして生まれた句であったのだ。

立風書房の『鑑賞現代俳句全集 第三卷』（二九八〇）には、明治41年から昭和21年に及ぶ一碧楼生涯の作品から五百数十句が収録されている。これを通覧すると「芝生」（昭和3〜7）、「杜」（昭和7〜10）、「若林」（昭和11〜12）に収められた作品が好ましかった。

水母が浮いては浮いては出舟出てゆく

われにかもぬれて花さき薊草

子を生し子を生して棲まふに赤いゆすらうめ

山一つ山二つ三つ夏空

十葉の花が白いなどこのやうな生涯

機関車とそれはすつかり別ものの草にみるかまきり

どつちへも流れぬどぶなんで辛夷さいた

魚にくるくるのまなこがあり冬の日ひとりの人を買われた

僕が一疋の馬であるやうに冬の日或時の感触

すうたらびいたら少年ピツコロを吹く春の地しめり

ことに最後の作品「すうたらびいたら」は中原中也の詩のようである。深い人生洞察とか「わびさび」ではない言葉の面白さやリズムが詩情豊かに踊っている。現在のいわゆる「うまい」俳句や、「難解な」俳句にはない魅力がある。

『中塚一碧楼研究』（尾崎繹子著）、『俳人中塚一碧楼』（森脇正之編）、『中塚一碧楼——俳句と恋に賭けた前半生』（瓜生敏一著）などを一瞥すると、一碧楼の句に西洋詩の影響が顕著なのは「芝生」以前のよう、「芝生」以降は一種東洋的な虚無感が加わるといふ。

中他の『山羊の歌』（昭和9）、『在りし日の歌』（昭和12）収録作品の生まれた時期は右の一碧楼の作品制作時期と大略重なる。例えば、『山羊の歌』「春の夜」の第一聯は、

燠銀なる窓枠の中になごやかに　一枝の花、桃色の花。

あるいは「黄昏」のやはり第一聯、

渋つた仄暗い池の面で、寄り合つた蓮の葉が揺れる。

文学作品が似ているとか共通するとかは個人的な感懐に過ぎないが、時代の流れというのは詩人の心に共通の影響を与えるものではないかと思う。

大正中期から昭和10年にかけて日本の文化全般で大きな変革が起きていた。間に関東大震災という、日本全体を揺るがす大惨事を挟んでいる。ロシア革命もあつたが、震災は、被災した人々には失礼な言い方になるが、日本に一種のカタルシスを齎した。ヨーロッパからモダニズム芸術の潮流が一気に押し寄せ、未熟な市民社会の上に、表面だけのモダニズムの模倣が始まつた。模倣から始まつたが影響も成果も大きかつた。しかし基盤の弱いものは、次の戦争の時代に敢えなく多くが伝統回帰していった。

日本の大正末期から昭和初期の俳句界も同様である。子規の始めた俳句改革から、河東碧梧桐かわひがしへまぎとろうの新傾向俳句が生じ、伝統俳句の中から新興俳句運動が起き、新傾向俳句から自由律俳句が生まれ、自由律俳句からプロレタリア俳句が派生していった。大正から昭和初期の流れである。残ったものはあるのだが、十五年戦争は俳句変革の気運を押し流していった。

「俳句とは何か」と問い続ける

『戦争俳句と俳人たち』を書く中で、時代に抗い弾圧された俳人たちがいる一方で、時代に迎合し、自ら戦意高揚に走った一群の俳人はいたが、それゆえに滅んでも不思議ではなかった俳句形式を、彼等が守ったという一面の功績に気が付いたのである。

俳句という文学は、多くの人々が創作に鑑賞に交互に関わることで成立する文学である。誰もが創作者であり鑑賞者になれ、全国に俳句を楽しむ結社や同人組織があり、各々が俳句雑誌を刊行するというような文化は他の国には存在しない。そういう俳句文化が戦時中存続の危機に見舞われたのである。さらに、終戦後には「第二芸術論」の中で再び俳句の存在価値論が再燃することになる。

もちろん、終戦後、自らの戦時中の言動が人間として、表現者としてどうであったか、類かむりや忘却することなく、真摯に反省する必要は不可欠で、それが徹底されなかったことが問題ではあったのである。今後も私は、俳人たちの戦中の言動を発掘、紹介し続けたいと考えているが、大切なのは失敗からの再生であった。ただそれも俳句の伝統が守られてはじめて意味のあることとなる。

同時に伝統と呼ばれる「俳句」という形式はどういうものなんだろう、定型は疑う余地のないもの

なのか、そちらに私の関心が移っていった。何ゆえに、自由律を選んだ人たちが現れたのか。彼らは伝統派の俳人たちよりもある意味において、定型を意識している。しかし、自由律俳句は戦前終戦直後の一時の隆盛を過ぎると忘れられた存在になってしまった。

同人誌『蠶』^{たぐみ}に連載していた自由律俳句についての考察が、資料の不足などもあり、12回で壁にぶつかったが、視点を变えて、「自由詩」「現代詩」の詩人たちの中には、俳句を作る詩人がかなりいる。彼らは明治時代の新体詩のように音韻を踏む作品ではなく、自由な発想や表現法で詩を書いていく。彼らが書く俳句もまた自由なものではないか、と調べ始めると、殆どが極めて定型を遵守した俳句であった。これも『蠶』に「詩人と俳句」として連載した。詩や俳句の理解もおぼつかないのに無謀な試みだが、分かったことは、かれら詩人は意外にも、定型、季語などの制約を遊んでいるようにも見えることであった。

今回の本を書き上げ感ずるのは、俳句における五七五という定型の持つ力である。おそらく自由律俳人たちも、その事は認識していたのである。俳句という文学行為は「俳句とは何か」と問い続けるもので、その正解のない解答を得るために、個々が様々な試行を繰り返す必要がある。その問いへの模索が大正末から昭和十年代初期までと、終戦直後の文芸復興期に燃え上がった。その中に自由律俳人たちもいたのである。俳句に関わる者は、五七五定型、季語、切れ字の効用に凭れかかることなく、考え続けなくてはいけない。自由律俳人たちの懸命な足跡はその意味を教えてくれるのである。



第一章 自由律俳句について

1 総合誌『俳句人』と敗戦に直面した自由律俳人たち

俳句全集から除外された自由律俳句

「序にかえて 中塚一碧楼——時代の生む魅力」でも書いたのだが、戦争俳句史をたどる上で、自由律俳句側からそれを見ることも可能であったなと気が付いた。しかし、自由律俳句にとって試練の時を迎えたのは、むしろ戦後の第二芸術論議以降ではなかったかと思う。先ず敗戦に直面した自由律俳人たちの動向から見て行きたい。

自由律俳句史、自由律作品史は何点か刊行されている。現在手元にあるものを上げると、

『俳句三代集』別巻自由律俳句集 荻原井泉水・中塚一碧楼編 改造社 昭和15年4月

『自由律俳句文学史』新俳句講座第一巻 西垣正禪寺編 新俳句社 昭和35年5月

『自由律俳句史とところどころ』唐沢隆三著 ソオル社 昭和40年5月

『自由律俳句の道——荻原井泉水とその門下たち』井上三喜夫著 私家版 昭和41年

『自由律俳句史雑記』唐沢隆三著 ソオル社 昭和46年11月

『自由律俳句文学史』上田都史著 永田書房 昭和50年7月

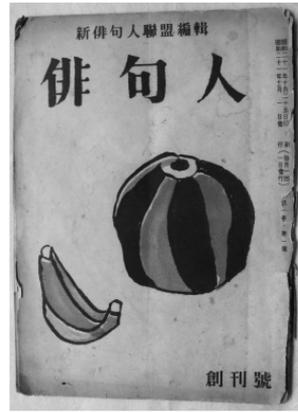
『自由律俳句史』層雲』百年に関する史的研究』小山貴子著 私家版 平成25年12月

他にも、「新俳句講座」第三巻『自由律俳句作品集』や、上田都史・永田龍太郎編『自由律俳句作品史』などがあるが、本書では、極力、実際の資料にそって私自身の感想と作品や評論類を紹介して行きたい。現代俳句文学全集類から、ほぼ自由律俳句は除外され、自由律を代表する荻原井泉水や中塚一碧楼、プロレタリア俳句系の栗林一石路（農夫）、橋本夢道の全集（評論を含む全集はある）も刊行されていない。むしろ一般にも人気の高い種田山頭火や尾崎放哉は、かなりの程度その文業が集められており、詳しくその生涯をたどることも可能になっている。しかし、彼ら二人のみを見て、自由律俳句の世界ということはできないだろう。

『俳句人』のなかの自由律俳句

ともかくも、最初は終戦後の俳句界の動きをもっとも反映している新俳句人聯盟の機関誌『俳句人』に発表された、自由律俳句を見ていきたい。新俳句人聯盟は、『現代俳句大事典』（2005・三省堂）によれば、「第二次大戦下に弾圧された新興俳句やプロレタリア俳句運動に携わった俳人たちを中心に、民主的俳句運動の全国組織として1946年（昭和21）5月に結成された俳句団体。戦中の日本文学報国会俳句部会による俳壇支配を打破して、民主的な文化活動を担う俳句の再建と進展を意図した。活動目的として、俳句本質の究明・現代俳句の確立・封建的結社意識の排除等を掲げた」（川名大）と評価されている。

中世和歌の研究者で、『寒雷』による俳人でもあった故井上宗雄先生旧蔵の俳句雑誌を、数年前入



『俳句人』創刊号
(昭和21年11月)

翌年(昭和22)6月、政治と文学の問題で紛糾、新興系俳人の多くが脱退した」とある。政治と文学の問題は永遠に解けないテーマであるようだ。その功罪は別として、『俳句人』の出発期に提出された左の記事などは、伝統俳句オンリーになっってしまったがちな今日、再考されてよいテーマであるかもしれない。

戦争中の俳壇 古家樞夫

第一巻一号

座談会・再出発にあたりて

第一巻二号

俳壇戦犯裁判のこと 湊楊一郎

同

俳壇の戦犯問題について

第一巻三号

俳句における封建制 栗林一石路

同

リアリズム俳句の道 橋本夢道

第一巻四号

手する幸運に恵まれた。その中に『俳句人』が、昭和21年11月の創刊号から昭和25年5月号まで揃いではないが19冊ほどある。俳句文学館には完備しているが、手元にある意味はまた別である。

その『俳句人』終戦直後の号を通覧していると、極めて政治性の強い雑誌であることが分かる。前述の川名氏の事典解説も、続けて「戦後俳壇の推進力となったが、

私は何をしたか

栗林一石路

第一巻五号

草田男の犬

赤城さかえ

第一巻七号

文化革命と俳句運動

栗林一石路

第一巻八号

新俳壇論——俳句を愛する大衆と共に

石橋辰之助

第二巻二号

自由律俳句誌ではなく、俳句総合誌の中、つまり全体的な俳句の世界における当時の自由律俳句を見るには、『俳句人』がまずは適当かと思う。当時の自由律俳句の紹介として順に上げていきたい。

『俳句人』第一巻より

創刊号（昭和21年11月）

炎天 読売闘争本部にて 栗林一石路

たたかふ顔がひしひしとそとは日ざかり

汗の香の機械を恋ふる君とみる

機械とみたい心炎天におさえてみる

炎天青し職場に帰る日のことを

君の汗の香にいく日のたたかひをおもふ

夏うぐひす

橋本夢道

バスを待つ炎天の一行がある

水のすずしい川は炎天の中

とにかく過去を捨ててに夏鶯の旅にゐる

あをじそに蝉の殻あり蝉の過去

夏木立昆虫一つ死にて墜つ

第一巻二号（昭和22年1月）

祭と人生

橋本夢道

炎天にゆれつゝ太鼓は草や花にひびく

赤いダリアの炎天で神輿は置かれ金色に

いくさなき人生が来て夏祭

喧騒もし人は祭をたのしめり

もし人生が祭であればまたさびし

終戦の秋

小澤武二

本はみな焼けてしまひ秋の灯の下にある二三冊の本
惜しかつた本の思出も虫に啼き細られてゐる

壁に己れの影遠い軽音楽も秋の宵すぎ

一間きりの住居にも馴れて紅葉が色づいてくる

紅葉もおほかたは散り罹災者として冬に真向ふ

霧

栗林一石路

風鈴が鳴り秋風とおもひ一人ある

秋晴妻となにやかや家のうらおもて

秋日照る顔一つ一つあきらかに

霧にうしろすがたはたらきにゆく

秋日うすし罷業のデスクやや埃り

第一卷三号（昭和22年5月）

悪農悪商

橋本夢道

地位もなし悪農といわれても米をかくしておく

作りたいいっしんに肥料のさざりにもかかり馬鹿を見た

悪商ヤミ屋だがしかたがない悪政をにくむ

へつらへばことの事情をのみこんでまたくる役人

ひげどき

栗林一石路

労働者ぐんぐんひけてくる夕日に染まり
工場を出るとからだで風にぶつかつてゆく
しまぎに赤く日の落ちる方へひけてゆく
工場はひけて書記局にひとり少女と花
ハモニカふいて少年工は冬木による

第一巻四号（昭和22年6月）

銀座風物詩 街に生くる人々 栗林一石路

くらい冬であつた街へ花屋ができた

人生は花ですよ奥さん——と花屋売りくる

春だ——とはおもいまた直角に街をまがる

ガード下から春があかるすぎる靴みがき

柳が芽ぶく夕刊売は母子であろうか

銀座風物詩 プチブルの街 橋本夢道

プチブルの街だ銀座の柳やわらかに青む

銀座がおびえ始まろうとする朝日が空の時計に射し

銀座十字路十字にせかされず十字にゆく笛を吹かる
儲けたいいつしん銀座千軒の鍋が火にかけられ
昼の銀座蒲やきのおいにしみて目で見すぐ
生活日々衰えここでズルチンしるこが流れこむ胃袋
銀座にも子供がいるぞ屈せず砂に汚れ
人くさき紙幣を数え銀座大小のネオン消ゆ

第一卷五号（昭和22年8月）

たまご

橋本夢道

子供のとき母は卵を肺病の兄にのみ食わした
卵の記憶大正三年兄はその朝卵を啜りて死す
悪平等よ働かぬ俺がサシミ、テンプラを食うか
卵よ卵よどんな世にお前はどんな位置にいる
妻よこの卵牝どりは貧富のために生まざりき

無題

栗林一石路

榎夫にあおう春の雪ふるより消え
本屋をやると榎夫は雨の日曜もない



『俳句人』第一巻七号
(昭和22年11月)

榎夫が引越しの縄でひつからげてぶつかさねてある本
もつてゆかれた本はよい本の引越しのほこり
くらしもいつしよに引越しの本と榎夫の奥さん

第一巻七号(十、十一月合併号)(昭和22年11月)

希望(四十一句よりはじめの八句抄録)小澤武二

希望があるので生きてはゆく春のうすづく陽だ

叛くと見せて叛き得ぬ子の心を知っている春の夜

ほんに麦畑の青さ子供のように叫びたいな

れんぎようが咲くので心に蘇ってくるもの

なんて汚ない姿で春の地に掃きおろされる

いつも大鞆さげて自分で闇屋といふ寒い姿だ

致死量といふ粉葉見せて白い歯を出して笑つた

獣のように運ばれて街に降りて務めてゆく

第一巻八号(昭和22年12月)

生活の花束(十四句よりはじめの六句抄録)橋本夢道

乳離れの子が乳の向うにどうなるか解からぬ世

希望をもち絶望になり私も世に食い下がる一人
やつとバスに乗れたこともほつと生活の断片
前、人の真似をして暮らせば何となるだろうね
椅子に机がある美服なく生活の腰かけている
生きて死んだような勇氣がいる生活の前後ろ

以上、第一巻の中より自由律俳句を抄録した。栗林一石路が新俳句人聯盟初代幹事長だが、全体から見て自由律がけして多いわけではない。社会性の勝った生活句、しかも連作が殆どである。

松尾敦之「原子ばくだんの跡」

『俳句人』第一巻で橋本夢道が三回に亘って「自由律俳句鑑賞」(二号、六号、七号)を連載している。むしろここで取り上げ紹介している作品の方が面白い。ことに第三回目で取り上げている『層雲』の松尾敦之あつゆき「原子ばくだんの跡」十句は心をうつ。十句全部を読みたいが、取りあえず夢道が取り上げている九句を紹介する。

こときれし子をそばに、木も家もなく明けてくる(二兎ばく死)
すべない地に置けば子にむらがる蠅
炎天子のいまわの水をさがしにゆく(長男亦死す)

この世の一夜を母のそばに、月がさしてゐるかほ
外には二つ、壕の内にも月さしてくるなきがら
ほのほ、兄をなかによりそうて火になる
かぜ、子らに火をつけてたばこいつほんもらうて
まくらもと子を骨にしてあわれちちがはる
なにもかもなくなつた手に四まいの爆死証明
降伏のみことのり、妻をやく火いまぞ熾りつ

このような作品を読むと、定型も自由律も関係なくなる。松尾は体験のあとの程度の時間を経て作品にできたのだろうか。

2 松尾敦之『原爆句抄』など

「とんぼう、子を焼く木をひろうてくる」

前節紹介した、『層雲』の俳人・松尾敦之の「原子ばくだんの跡」を読んできた、『円錐』同人・今泉康弘君が、『松尾あつゆき日記——原爆俳句、彷徨う魂の奇跡』（平田周編・長崎新聞社）という新書本が最近刊行されたと教えてくれた。偶然はあるものだと、早速取り寄せて目を通した。

同書は、二〇一二年八月三日に刊行されたもので、編者は松尾のただ一人生き残った娘みち子の長男である。

「原子ばくだんの跡」は、同書によれば『層雲』昭和21年12月号に掲載されたものようだ。『松尾あつゆき日記』は「覚書（昭和20年8月9日～15日）」と「日記（昭和20年9月21日～21年6月9日）」からなるが、「覚書」は被災後に日記形式で記録されたもので既発表、「日記」は今回初めて発表されたもので、原爆で妻と三人の幼い子供を亡くし、家屋家財をも奪われ、さらには職までも失い、高等女学校生で瀕死の重傷を負った十五歳の娘と二人、安住の住まいを求めながらの絶望の日々が記録されている。いざとなれば二人阿蘇に身をなげて自殺をするだけだと心に決めている。この瀕死の娘さえ死んでくれればと時に思うが、やはり支えは娘の快復と俳句であった。できた俳句も日記に記されてい

く。心をうたれる作品が多いけれども、左の三句は痛切である。

たよりなげな陰のうす毛も、母のない子

たてにしてもよこにしても動かなくなった時計だ

よこにねせておけば動く時計

亡き妻に良く似た（同書巻頭に家族の写真がある）身体のかかない、うら若い娘を父が入浴させる。思うようにならない衣食や優れない娘の体調など、先の見えない生活を詠んだ哀切極まりない句だ。

「覚書」には前節紹介した以外の次の句もある。

とんぼう、子を焼く木をひろうてくる

朝霧きようだいよりそうたなりの骨で

くりかえし米の配給のことをこれが遺言か

炎天、妻に火をつけて水のむ

松尾は、どんなに苦しい時でも、句を作り続けた。俳句は絶望の中、微かではあるが確かな人生の杖たりえているのだ。

戦時中の松尾の句

手元に『層雲』の年刊句集に当たる『層雲第十六句集』（昭和17）と、戦時中、『層雲』が『海紅』『陸』と雑誌統合され『日本俳句』となっていた時期の作品を集めた『自由律俳句集』（『層雲句集第二十二集』）にあたる。昭和33）がある。そこに掲載された、松尾の戦時中の句を紹介しておく。

月がくらくなくなつたり木の下の雪

暗いおくにはマリア様と御子、みんな畑にでてゐる

汗して、草のつゆもわくころ

青田のはての海の雲汽罐車に給水してゐる

出征のこゑ、機械のよこから旗とつてでる

はじめて握る手の放てば戦地へいつてしまう

しばらくは出征のうたごゑとゆきつとめへいそぐ

山に、空をまもる灯があつて秋めく満天の星

蹄鉄うつてもらうてゐる秋まつりのよこ

みんなそろうてひとりはねんねこのなかせつぶん

港を出ると荒れてゐるのみ水のひしゃく

もう路のとふが陸よりもきもの一枚ぬくい

夜に入つて風がおちたあかぎれの貝ぐすり

ねんねこの中の子は、原爆被害のときも赤子だった次女由紀子のことだろう。どこか戦時中の重苦しい気分はあるけれども、静かで落ち着いた生活が感じられる句だ。原爆は一瞬にしてその生活を破壊したのだ。

前節と今節紹介したような松尾敦之の思いは、果たして定型で表現できるのだろうか。松尾に俳句があったことは紛れも無い幸せであったろうとは思いますが、詠われている事実は不幸そのものである。松尾は時に旧約の「ヨブ記」を読み、中里介山なみざとかいざん「大菩薩峠」を読んで心の支えとしていた。否応なく襲いかかる悲劇、不条理というのだろうか。

松尾の戦後

改造社は『昭和万葉集』の成功の勢いを受けて『俳句三代集』全九巻別巻一冊を企画した。本編完結後の昭和15年5月に刊行された別巻が「自由律俳句集」で荻原井泉水と中塚一碧楼が編集した。

この本については第二章で詳しく触れるが、この本には松尾敦之の作品が二十五句収録されている。これは井泉水や一碧楼などが最大数の四十句収録であったことからすると、当時既に自由律俳句界では知られた存在であったことを示すものだ。

空にもくれん、キリストは十字架に居られる

絵硝子ほのあかるくどこからか風がはいつてくるオルガン



松尾敦之著『原爆句抄』
(昭和47年10月・私家版)

海風つつぬけるみあしが消えもしないで、マリア

などの句がある。

巻末の作者略歴によれば、当時三十五歳、商業学校教員で句集『浮灯台』があると記されている。

この連載原稿を書いてからしばらくして、松尾の『原爆句抄』(昭和47)を入手することができた。巻頭に井泉水の

「序にかえて」、巻末に松尾の「爆死証明」と「あとがき」が収められており、その後の足跡を知ることができた。「原子ばくだんの跡」は、最初『長崎文学』に送ったが掲載されずに返却されてきたが、『層雲』には昭和21年12月の冬冬季号に掲載された。その後、昭和30年に刊行された『句集長崎』(七二五人のアンソロジー)に収録され、その序文で『長崎文学』不掲載は占領軍の検閲によるものと判明した。『層雲』は検閲の眼を逃れたことで、当時これを読んだ橋本夢道が『俳句人』に紹介したわけだ。なお、「爆死証明」は昭和25年に俳句総合誌『俳句往来』に求められて執筆、後に『中央公論』昭和31年8月号に再録された。手元の『俳句往来』を調べると、創刊号の特集記事として、瀧春一の俳句小説「山湖にて」、阪口涯子の引揚手記「大連脱出」と共に掲載されている。合本用として各号の表紙を外したもので発行年月がわからないが、昭和26年1月である。古川克己の編集で泰光堂の刊行である。第二号巻末に全国主要俳人住所録が掲載されているが、松尾の住所は長野県埴科郡屋代町屋代高校となっている。『原爆句抄』の「あとがき」でもその点には触れられていて、昭和23年に再婚するが、「心の

痛手を癒し、新しい生活に入る」ため、長野県の高専学校に転任、長野では同県の被爆者の会の設立に尽力、昭和36年退職して長崎に戻ったようだ。『原爆句抄』は私家版の非売品で、印刷は長崎市の藤木博英社である（一九七五年に文化評論出版、二〇一五年に書肆侃侃房から再刊）。

『俳句人』第二巻より

さて、前節に続き、新俳句人連盟の『俳句人』昭和23年分（手元にある五冊のみだが）から自由律作品を紹介する。

第二巻一号（昭和23年1月）

東京 木村飛泉子

関東水害地十五句より

水面に屋根だけの草の穂に秋風がゆれてゆく
水禍のあとに村あり人あり夕焼蟲の聲
きびしい災害の中しかし村民はたたかつてゐる
重く實つてキビが二三本と水禍地蟲が啼くばかり
白衣も残暑の汗と防疫液をさしつゞけてゆく

さんまの話 十三句より 橋本夢道

さんま食いたしされどさんまは空を泳ぐ
もしもさんまが食えたら千辛萬苦忘るべきに
ほんとうの話せめてせめてさんまの食える世がこい
東京や働けどさんまも食えずなり果てし

失われし生活 十句より 山口草蟲子
教権は立たず虹いつばいの雲沈み又流る
地の鹽とよ向う見ずに焰へ飛ぶことに疲れしに
失われし生活誰の目か明日あるを信ぜむ
人を恐れるわが性木枯の深夜を歸らざる
生ける身の霧に犯され幾夜驛に睡りし

わがうた(四) 九句より 橋本郁夫
四辻に汗ぬぐえり子に靴買わねばとおも
あれた妻の手に子の重みを移す
つかれてはつひひとりおどけてみるかがみに

浅草風物詩 十句より 平松星童

やけて小さくなつた観音さまよ秋陽の昏いなかにおられる
オベラ役者のような燕ひるがえると浅草ごちゃごちゃ人がいて秋の日
仲見世あたり頭にほこりのせてあるく人々のしたしき浅草

旗江（十月一日に生まれた長女 十四句より 津田白

月が日のやうにかがやく二人目の子が生まれるんだ

産湯を沸かしながらすつかりよろこんでいる俺だ

子よ生活は苦しいが生まれることをお前も喜べよ

第二卷二号（昭和23年2月）

きみ 二十一句より 川村志青

メモを取るを忘れ君と名書いてぬりつぶしたりしている

シグナル青しさよならといつたばつかりなのに

君と別れて車窓の星にながれる電線

流水の夜明 十一句より 山口草蟲子

枯草を焚こう流水の沖鳴がせりあがつて来る

煤けたランプ死んだ漁師の顔浮かんでいて

爐にくべる鳥貝葦火がすぐまつ黒になる
葉罐も黙りこくつて流水の響きいていた
部厚いランプ流水の詩稿などうそ寒くて

亀問答 十五句より 橋本夢道

冬亀の 甲ら かわきて 人の世 飢ゆ
冬の日を 亀は 甲らにのみ たまわる
冬の亀 何主義も 特に理屈もなき 目つき
人の世と何の関係もなく亀は甲らの中に生く
亀よ 亀よ 貧乏の饑渴に 人は堪うべきや

第二卷三号（昭和23年3月）

日々行商 三十二句より 加藤裸秋

食うのがやつとでぼろを着てそれでも梅がふくらんで
ここも買つてくれないぬかるみに柊の花
行商のわれにほうれん草の赤根は束ねてある村
赤々と冬日のさなかを行商人としてゆく
妻に日銭をわたしておく朝々、行商に出る

土龍の歌 二十六句より 平松美之

もぐら月夜ははてもなくほつてゆく泣きながら
もぐらはもう泣くまいとおもい上は木の葉のつもるおと
もう何も信じないことにしもぐら口うごかしている
人にだまされずおのれをだますもぐらのくらいながい夜
年の暮の人間ねずみのように飢えて出歩く

雪の山脈 五十四句より 栗林農夫

農地革命がわたしにも買取令書一枚
買いあげられる冬田を父は死んでいる
もうわたしの田ではない雪のひと並めに
ふるさとは雪の山朝日とつついて
空をかみきつて山脈が白い齒のように

バラード・チャポネーズ（連作俳句） 古家権夫

司法省

天皇の法廷焼けぬ見て通る

天皇の法廷とわにがらんどう

天皇の法廷尾崎を殺せしか

天皇の法廷吾児を餓えしめき

天皇の法廷天火これを焼く

独房

夕暮れが夕暮れが迫ってくる

水道をひねつて物云わぬいちにち

水道をドアなき部屋に聞きたしかめる

第二巻四号（昭和23年5月）

慟哭（長男潤郎を不慮に失ふ）二十一句より

福安愴桑子

一さじの水一さじの林檎汁あゝ何と美味しがる子よ死ぬな

七時間の縫合手術に耐へた幼い命におうおうと親

寝棺にニツコリした死顔を抱き入れる

慟哭の路は川岸にあつてそれを登り降りる

遺骨を抱いて省線にげつそりと、然し嘘ではないのだ

本誌の旧蔵者井上宗雄先生の句も「作品」欄に掲載されている。『寒雷』系の俳人の筈だが、本誌

では何故か自由律の作品である。

闇屋と言われても学生日をリュックに負うてゆく

零が四つついている税金が來ている春先の店先

税金よりも母の泣きごとにつらく坐つている

重いリュックで歸て來た母は何べんも思い出す

天皇にも赤旗にもかかわりなく窓口に税金納める

昭和23年の『俳句人』における自由律俳句は、前年よりも増えているようだ。すべて生活詠と言つてよい。リアリズム俳句というのであろう。俳句は作者の生活と密接に関係するものだが、あくまでも芸術であり、創作であり、生活≠俳句ではない。美を創造するものである。俳句に於ける美とは何か。それは調べであったり、花鳥諷詠のような、謡われる内容そのものの美であったり、もっと奥にある、人間が日々の生活の中で感じた思いを俳句という形につくりあげる、その行為そのものが美とも言えるのかもしれない。リアリズム俳句を前にすると、俳句の美とは何かという思いが一層強くなる。

3 『自由律』の創刊と生活の自然詩

俳句雑誌の統合と分裂

昭和15年4月に設立された日本俳句作家協会（第一部伝統派（有季定型）、第二部自由律（後に内在律と改称）及び新興派に分けられていた。同会は、昭和17年2月に日本文学報国会に抱合され俳句部会となつて一部二部の区別はなくなるが、後の第二芸術論ではないが、一部二部という区別はおかしなものというしかない。ただ、現在も俳句史を語るとき、自由律はその範疇に入れないか、考察されるにしてもわずかに触れる程度の扱いでしかない。

確かに主流とはなりえなかった自由律だが、そんな中でも派閥があつて離合集散を重ねてきた。特に戦時中は、雑誌の統合で、自由律の二大誌である荻原井泉水主宰の『層雲』と、中塚一碧楼主宰の『海紅』が昭和19年5月に統合され『日本俳句』となつた。この誌名は両者の母体である河東碧梧桐が選を担当した雑誌『日本及日本人』の俳句欄「日本俳句」に因んだものであろう。だが、統合が強制的なものであつた以上、一つの俳句雑誌に二つの中心があつたような形であつた。戦後、『日本俳句』は当然のように分裂、井泉水は昭和21年6月、「再建最初のページに」（二月十一日執筆）と題した宣言をして『層雲』を復活させた。この文章については次節で改めて触れたい。一碧楼は、経済的理由や

健康面からすぐには『海紅』の復活を果たせず、西垣卍禪子を中心とした『陸』と提携して昭和21年3月『自由律』を創刊する。『陸』は、卍禪子『俳誌稿』、原鈴華『碧雲』、杉山田庭『露』、宇野竹緒『鳴草』、加藤花臥衣『サンデウ』、内田南艸『多羅葉樹下』、朝倉九鷺子『白塔』、奥村四弦人『北斗』の八誌が『俳句日本』創刊以前に統合したものであった。『碧雲』は第二章で詳しくふれるが、私はほかの雑誌は見たことがない。

『自由律』は発行人中塚直三（二碧楼）、編集人西垣隆満（卍禪子）であるが、事実上は卍禪子にあって、尾崎騾子著『中塚一碧楼研究』（昭和51・海紅同人句録社）に書かれている。

『自由律』創刊号は、同人作品欄である「第一輯」を巻頭に、随筆二（松宮寒骨）、俳壇無駄噺（淡路呼潮）、句評（妹尾美雄・宇野冢籟）、選句録（卍禪子・一碧楼）、新人はかうした意味で新俳句を作つて下さい——と私は云ふ2（卍禪子）、指針を記す13（二碧楼）、平野社二蓆、及び後記から構成されている。連載は『日本俳句』からの継続であろう。『自由律』は、昭和21年12月31日の一碧楼の没後に『海紅』が復刊した昭和22年1月号まで出された。

『自由律』創刊号「第一輯」から

『自由律』創刊号の巻頭「第一輯」（同人作品）にはどのような作品が掲載されたかを見てみよう。前節まで紹介してきた『俳句人』掲載の作品とは、同じ自由律といっても全く違った世界である。最初に喜谷六花と細谷不句という、河東碧梧桐に師事した新傾向俳句時代以来の古老俳人を配している。一人七句が収められているが、各人の作品一句ないし二句を選んであげてみる。

菊に佇めば雞ども雞ならぬ吾を囁き

むき栗一つ二つをいたゞくそして見る著我の葉きほひ

晒しある糸瓜ときどきに叩く一つの石

もみくちや車窓ゆ戸塚あたりが鷺四ツ五ツ

封筒はつて居り四畳半一つの家にてしぐれつつ

薄光る空の葡萄の赤葉つやや

蝙蝠、平和産業の灯がつきはじめる

花にも落日おち葉を焚くひとり

雪晴町裏は紙芝居屋さんの赤い鼻

この頃さ濁り雨の川筋も腹立つことのみ

木の葉降る昼酒はかなしき一つかも

橈曳く青年の手づな張つて雪吹く

曇つた日の耕作悲哀の雲抱きつ

歩みつづける、私のあなたのどなたもの粉雪

山に来て寝る遠き山風の暗き窓

大口竈立て老いてぴつたりと瓦焼く瓦屋

ちいちいが鳴るとる姉さん冠り夜業の粉挽白

喜谷六花

同

細谷不句

朝倉九鷺子

森林五

稲垣一鳴

宇野冢籙

榎田東谷

照井稗人

関口比呂志

伴野龍

すずきゆきひと

森谷乙山

早川昇

伊藤柳江

園木六色子

南畝三坡

山ぶだうがとれてそんなおぼあさんとバス中

龍田真魚

湯呑と新聞とそれだけのきよらかな冬朝

伊藤弥太

木を伐るに冷えて来て吹きおろす風

田辺愛水

山へゆく獵師が声けさ田のうすらい

金子曙山

それは一つの岩のかたち雁来紅暮れてしまふ

松本西平

ふかし藪の冷えてみて句誌を読みて

中根尉策

牛小舎へ牛を追ひ若者しあわせな肩幅

須貝秀

生き堪へる畝々泥深く菜を間引く

佐藤柊坂

もの書き終れば礼をいふ妻で冬の夜

半田雨衣

朝早くから山鳩なく炭竈のけぶり立つ

日下泰山楼

鴉まなこありあたり土凍つ

近藤紫村

声をかけたたく藪の葉の茂り藪畑

一ノ瀬水楼

家に一本栗の木あり拾ふにぬれてゐる栗

渡辺碧山楼

農家の朝は脱穀する農夫と霜の田畑

大川しげる

藁刈り終へるをりをりにそらをとぶ鳥

永井はるを

崖の芒枯るゝ山みちの海遠し

泉大畹

畑の薄雪山羊ばかり鳴いて雲たれてゐる

秋元桜水

草のびほうけこゝの向日葵実を結びたる

藤田三六亭

氣持定まりて地の石路黄なるべし

母の脊がみえ冷たい菜葉抜いてゐる

病める友をり枕べりに我をり冬の朝

夜のどぶろくの徒に交わらない私に来るひとり

なに言ふことがない壕に落葉はきこむ

堪へる生活を話す枇杷の木々夕日

石工の家ひろびろ芒ほゝけ火花ちらす男

田の面暮れて来る満月の少し上り村人

われもたれもゆくに霧に見えかくれする

しらす干しそれをいふ明らかに霜

草が刈られ草がはこばれる空間秋の日

横付けの舟から糶のかますを運びて男

仔馬はね出すさざんくわの花さきし

土をかける軽くかける氣持麦の芽

米を作つて米を作つて人が死ぬ芒の穂

懸巢が鳴くを落葉ふみふみゆく小径

製本工場少女多く銀杏の葉ゆつくりとおち

甘藷の葉一色に青し動かない畑

赤松英二

山本光王

大倉親英

佐藤禾黄

牧野秋風嶺

今井行雄

佐藤豁山人

武藤牧之秋

牧田雨煙樹

堀川屈人

後藤零丁子

宮坂岱風

黒丸古吉

山田不雪郎

川島南海城

沼文生

星野武夫

藤森澤瀉

冬の陽の色が大根の太きが泥に

湖鵜をる秋となりてなんぼうみずうみ深く

爐もみぢ散る山を後ろとほく来し思ひに

稲架に稲を干す人は人とうごく日ざしに

胸突く秋の出水川に四つ手を張つて

馬に尻尾あり冬の日じつとしてみて之を動かす

月代の雑木山細い雑木が冬

霜旦川迅きに渡しに一人のつてゐる

夜になつてそりが黒く見えてそり押す人

唐招提寺をはなれ靴の泥拭ふ秋の日

葱は知性をかんじる葱をむきそれを煮る

あらゝぎの実は赤い頃日諏訪の大神

八つ手の花が咲き人が通る人の横顔

家のうちとの風林の風冬近く

独居今日も長畦だいこん畠の見える朝

鴨打ちかへる山はそのかたちにてくれる

冬の七つ星落ちて来ない大空

と言ふよりはむしろあはれむべき彼女のゑりまき

田口朴也

石田鳴子

岡本影薫

松宮磨研

中原我楽

水谷貞二

武居泊雨川

今川溪花

吉澤稲市

渡部冬三

吉川金次

金子夜潮

秦白路

木内柳陀

桔梗谷椋溪

筑波波秀

守矢自由也

山崎多加士

わが真向登りくるは秋日の阿闍梨

きびしくくらす或時菊見れば美しと見る

蝗を炒るとて厨にてその人の声

牛とかへる秋の野のひろさをうしろにす

ふたりくらしに馴れる父娘さざんくわに

冬草生きてあり白い鶏と白い兔

冬朝淡路を近く道のある海

雲さむし芽麦の丘を一つこえて来て逢へり

わがこの日ゆく所ありて来かゝりし茶の花の所

枯れがれの野にありてその牛の胴体

東寺の塔みえ冬あさ雨ふつたあとの軒並

雨降り公孫樹葉降りくらし居るに石の佛さま

晴れると風が出て子供たちと麦の芽

霜しろき気兼ねなくあるく

秋の雨降る雉のなく麦秋のいろ一色

地の光り大根の葉二ならび朝やけて

芒の穂遠く山あり陶房からむとして西日

食ひつなく日々の雨にぬれて桜の太芽

石原蘇来

山田蒲公英

林鷺水城

三国屋自省

浅野麗水

小林満巨斗

蓬萊鶯郎

谷しんいち

福島一思

相沢華芳

長屋青橙

渡部嫁ヶ君

九貫十中花

池田亜杜子

若林乙吉

松宮寒骨

岡田平安堂

田中海灯

葭の穂なびく浮草は向ふの岸へ

宮林釜村

冬朝めしをくふ母ありし時の如く大根おろし食ふ

高橋晚甘

日てり芒を刈り壕を埋めた我家

南晴星

道を仔牛引張る男と粉雪に降られつゝゆく朝

安斎桜碗子

けふ和平来哘うち枇杷咲く

妹尾美雄

枯芒鴉は鴉の子を連れて来て鳴く

内田南艸

われら冬木と共にある雲が夜が明けてくる

中塚一碧楼

息子還るを待つ霜朝家の戸をあける

同

老母寒い風のあり夕の陽萱の穂にも

西垣卍禅子

青い草の鉢を置てみて茶台にみんなの正月

同

以上は、同人作品欄で、他に一碧楼、卍禅子それぞれの選になる「選句録」が後半に掲載されている。それぞれの巻頭と二席を一句ずつあげておこう。

一碧楼選

牡蠣を剥くをんなひとり海あれば鷗浮びて

宮本夕漁子

増毛の雪嶺雪をかむりし肥桶を荷なふ

伊藤二一郎



『自由律』第一卷七号
(昭和21年7月)

卍禅子選

宵月明り枯れしと山々妙高見えて

稲垣藪柑子

疎開わびしも残菊時雨る夜毎夜毎の

久野仙雨

宮本と久野の名は『俳句三代集』別巻「自由律俳句集」(昭和15)にもあり、宮本は『海紅』同人、久野は様々な結社をへて当時は『白塔』同人であった。作品からも句歴を感じる。

以上の『自由律』創刊号は神奈川近代文学館所蔵のものによった。所持しているのは第一巻七号(昭和21年9月)のみである。発行人、編輯人とも創刊号と同じである。発行所も同じで、東京都足立区伊興町狭間の自由律社。この住所は、前節にも出てきた『俳句往来』第二号掲載の「主要俳人住所録」によれば、卍禅子の住所である。自由律社が後に新俳句社になる。昭和35年、彼の編になる『自由律俳句文学史』(新俳句講座第一巻)も新俳句社刊行で同住所である。

表紙裏から始まる「第一輯」三人目に、『碧雲』主宰の原鈴華の作品六句が掲載されている。初めの二句を紹介する。

梅の花へ月が出て水仕の音

菜の花ほつほつ水菜洗うてゐる

戦時から日常へ

前節で取り上げ紹介した『俳句人』の作品が終戦後の社会の変化を反映していたのと比べると、戦争が終わり、戦場から故郷に帰り本来の生活にもどった人々の平穏な日常が詠まれているという印象である。僅かに、一碧楼の句に、息子が戦場から帰るのを待つ句があるのと、用のなくなった防空壕に落ち葉や芒の枯れ穂を捨てるという同趣の句が二つあるくらいで、戦争の影や、戦争を引き起こした側への責任追求、社会批判といった面は全く感じられない。「国破れて山河あり」という杜甫の詩があるが、まさにそのような作品群である。

もつとも、GHQのプレスコードに抵触する作品は掲載できなかつたという面も無視できないかもしれないが、戦場での辛い経験は心の奥にしまいこんで、ともかくも貧しくはあるが必死に働いて生活を立て直そうというのが、当時の普通の人々の抱いていた思いなのかと思う。

句集『砲車』などで、戦争俳人として名声を得た長谷川素^{そせい}逝が、軍務を去つた後は『ふるさと』や『暦日』で、本来の自然派の俳句を作つたのとも共通したものがあるだろう。

ここに紹介した自由律の作品は、「ホトトギス」の花鳥諷詠とは違うが、生活の中の自然詩といつてよいかと考える。季節感は濃厚であり、定型ではないが俳句として読んであまり違和感は覚ええない。『俳句人』に掲載された社会性の勝つた自由律作品が、感情をぶつけるために定型を破る必要があつたのとは違う。だが、なぜ自由律なのか、自由律でなければ描けない世界なのかというのが、結局は

自由律俳句を考える場合の最大にして基本的な問題となる。これは追々考えていきたいと思う。

『自由律』創刊号の「編輯後記」の次の一文を紹介しておくことにする。

僕達の新装した姿は、旧来の読者には兎に角、一般には異状な感を与えたであります。これからは自由に、明朗に僕達は行動することが出来ます。然し大乘的には——もともと俳句日本社は戦争に依つて出来たもの故、終戦の今日解散が当然であると云へませうが、実は遺憾なのです。それは「和する心」と云ふ心の持ちやうが、俳壇にあつて急に捨てられてよいものとは思へないからです。和する心とは俳諧の道であり、人間としての生命の道でもあります。私達は性得「和」の人であります。真に人生を清らかに明朗に生きやうとすること、即ち「和」の心構こそ僕達の真実でありたいのです。

おそらく結社がなければ、今日の俳句は存在しないだろうが、人間一般の社会同様厄介な存在でもある。次節「荻原井泉水の戦後の出発」でも、この問題に触れることになる。